歴史民俗資料館だより

馬鍬（まぐわ）

田の代を整える代掻（しろか）き用具で「マンガ」ともいいます。

春、田植えに備えて犂（すき）を用いて田をすきますが、起こした土は塊（かたまり）になっているため、これを砕（くだ）いて平らにしなければなりませんでした。このときに用いるのが馬鍬でした。

ふつうは、牛馬に引かせますが、人力による振馬鍬、手馬鍬もありました。

馬鍬は、長さ一〇〇～一二〇センチメートル、幅一五センチメートルほどの鉄刃を一〇～一二センチメートルぐらいの間隔で九～一〇本ほど並べて角材につけた本体と、これを操作するための鳥居状の取っ手、牛馬に装着するために左右につけたハヨナワ掛け（鉤（かぎ）状の取付具）でできています。牛馬に牽引（けんいん）させるには、胸当て（ハモ）にハヨナワを繋（つな）ぎこれに馬鍬を繋ぎます。馬の場合は口取りをする者と、尻取りをして馬鍬を操（あやつ）る者の二人で作業に当たります。牛の場合は一人で行いますが、疲れてくると牛も動かなくなるため、ムチをいれながら行ったと言います。

犂で田起こしをした水田は畦（あぜ）を塗り固めます。そのうえで水を入れ、四～五日放置して土に十分に水が浸透するのを待ち、代掻きにかかります。はじめは、荒代（あらしろ）という掻き方で、牛馬に引かせた馬鍬を、尻取りの者が地面に押しつけて刃が深く土に食い込むように操作して、縦に掻き均（なら）し、次に横に掻き均して土塊を砕きます。この荒代が終了すると、しばらく間をおいて中代（なかしろ）を行い、さらに日をおいて仕上げ代を行います。仕上げの代は、あまり深く掻かないで水面を均すように行います。一反行うのに二時間ぐらいかかったようです。この作業を七～八回行うと、水田は平らになり代掻きは終了します。この地域では牛馬を持っている人が少なく、七割ぐらいの農家の人が牛馬を借りて馬鍬を使っていました。耕作面積の少ない農家では、代掻きは均し備中で行っていました。

このような牛馬による代掻きは、耕運機（こうううんき）が普及する昭和三〇年代半ば頃まで行われていました。

資料館では、町民の皆さんから寄贈していただいた馬鍬を保存しています。

館蔵品展

灯と暖 ～昔の生活～

【期　間】
11月8日（火）～12月4日（日）
【開館時間】
午前9時～午後5時
【休館日】
月曜日（祝日の場合はその翌日）
【入館料】無料

ごみ減量化コーナー ⑧

ごみを減らすためのキーワードに3R「リデュース、リユース、リサイクル」があります。今月は、2つめのR、リユースをご紹介します。

Reuse（リユース）とは、「使えるものは、繰り返し使う」ことです。

一度使った物をすぐにごみにするのではなく、もう一度使うことで資源を有効利用することを言います。

昔は良くあった「おさがり」という言葉。昔使っていたものを再使用したり、他の人が使っていたものを再使用するということも立派なリユースになります。

また、フリーマーケットや、インターネットでのオークションサイトにより、業者を経由せず消費者対消費者という新しい形のリユースも誕生しています。

- 古布はぞうきんとして使いましょう！
- 古くなった家具も、補修・加工して使いましょう！
- 故障した家電製品は、修理して使いましょう！
- リサイクルショップやフリーマーケットを利用しましょう！